第１部　各校の概要

森林文化アカデミー 久津輪教授（以下、久津輪）
それでは、トークイベントを始めさせていただこうと思います。よろしくお願いします。
タイトルにもある通り、岐阜県内には、なんと木工を学べる学校というのが４つもあるんですね。今回は、４つの学校の教員がここに集まり、人材育成について話し合いたいと思います。まず私、岐阜県美濃市にあります、森林文化アカデミーという県立の専門学校の教員の久津輪と申します。よろしくお願いします。

木工芸術スクール 菊地指導員（以下、菊地）
私は岐阜県立木工芸術スクールの指導員をしております、菊地と申します。よろしくお願いします。

森林たくみ塾 小木曽塾長（以下、小木曽）
こんにちは。私、ここ高山市の清見町にあります、森林たくみ塾というところで塾長をやっています、小木曽と申します。よろしくお願いします。

飛騨職人学舎 玉田学舎長（以下、玉田）
皆さんおはようございます。私は飛騨職人学舎で学舎長をしています、玉田と言います。よろしくお願いします。

久津輪
ということで、この４校それぞれ特徴のある人材育成をやっていまして、皆さんにご紹介するために、５分ずつのスライドを準備してきました。順番に発表していただこうと思います。まずは菊地さんにお回しします。

菊地
改めまして、木工芸術スクール指導員の菊地と申します。よろしくお願いします。
「木工芸術スクール」という名前のおかげで、ちょっとわかりにくいのですが、県立の職業訓練校です。木工芸術スクールのいいところ、１つ目は「１年間で技能が身につく」ことです。訓練期間は１年で、１日７時間の訓練が年間で 200 日あります。総訓練時間は、1400 時間になります。ただし、優れた技能を身につけるには、たくさんの練習が欠かせません。休日も多くの訓練生が自習に励んでいます。訓練生の定員は、30 名です。高校を卒業したばかりの 18 歳から、転職を目指す幅広い年代の訓練生が一緒に学んでいます。私を含めた専任の指導員が４名と、さまざまな技能のスペシャリストが専門講師を務めています。

1 年間のカリキュラムは、のみやかんなの使い方から始まり、木工機械の使い方へと進みます。材料の知識や、図面の書き方、塗装の仕方なども学びながら、最終的には、自分でデザインした家具を自分の力で作り上げます。

木工芸術スクール 菊地指導員

こちらが訓練の様子です（写真を用いて「刃物の研ぎ」「のみで木材に穴を掘る」「かんなで木材を削る」「課題製作のスツールとキャビネット」「塗装の仕方」「JW-CAD を使った製図」「木工機械を使った加工」などの訓練風景を紹介）。また、伝統工芸や専門的な技能も学びます（写真を用いて「皿やお椀などをつくる、ろくろと呼ばれる技能」「春慶塗と呼ばれる、漆塗りの技能」「椅子やソファなどに欠かせない、クッションを作るための技能」「木を蒸して曲げる、曲木という技能」を習う様子を紹介）。そして、毎年 3 月の第 1 日曜日には、製作したすべての作品を抽選販売する「技能作品展」を行っています。たくさんの来場者から、客観的な評価をいただくことで、今後のモチベーションにもつなげています。

木工芸術スクールのいいところ 2 つ目は「就職に強い」ことです。過去 5 年間の就職率は、ほぼ 100% です。全国から、たくさんの求人をいただいています。家具メーカーや家具工房に就職する訓練生が多いですが、最初から独立したり、家業を継いだりする訓練生もいます。

木工芸術スクールのいいところ 3 つ目は「費用が少ない」ことです。もし、木工芸術スクールに入ろうかな？と思ったら、必ずお近くのハローワークに行ってください。訓練校に通っている 1 年間は、失業保険の延長や、失業保険が切れていても、月 10 万円の給付金をもらいながら、訓練を受けられる場合があります。1 年間にかかる費用は、21 万円ほどです。さらに、給付の対象者となれば、入校金と授業料も免除されます。また、ハローワークの給付対象者ではない、若年者が優先して入れる寮があります。来年度の寮費は、月 3 万 5 千円の予定です。訓練のある平日は、3 食の食事付きです。休日は自炊か外食となります。以上が、木工芸術スクールの紹介です。木工を始めるきっかけとして、ぜひご活用ください。ありがとうございました。

久津輪
ぴったり 5 分に収めていただきました。ありがとうございます。
では、たくみ塾の小木曽さん、お願いします。

小木曽
はい、森林たくみ塾は 1991 年に始まりまして、今年で 35 年目になります。私たちが育成する人材像は、ものづくりを通じた人間形成ということで、職人として必要な素質というのを、現場でものを作りながら学んでいく、それで 2 年間で職人として育てて社会に出していくということをやっています。一般的にものづくりというと、木という素材をどう加工してものを作っていくかというところだと思いますけれども、私たちは森にも視野を向けながら、なぜ私たちが木でものを作っていかなければいけないのか？そんなところも視野に入れた職人を育成しています。最終的に私たちが目標とするのは、再生産可能な木という資源を使って、この循環型社会を作っていきたい、そういう思いの中で人材を育成しています。単にものを作れる技術、知識を身につけるだけでなくて、社会に対してアクションを起こしていけるような、そんな人材を育成していきたいと思っています。

卒業生が今、271 名になりますけれども、特徴としましては、卒業生たちの 77.5% は今も木工業界に籍を置いて仕事をしています。木工以外も、建築、林業とか、環境教育まで入れると 8 割近くの人がたくみ塾で学んだことをベースに仕事をしているということが言えます。結果として、今は就職をする者より独立している者の方が多く、100 人を超える者たちが独立をしています。いろんな木工の広い分野の中で、第一人者的な活躍をしながら木工をリードしてくれている、そんな OB たちも結構見受けられるようになりました。卒業後も、ここ高山市に定住定着しているのが 44 名います。大半の塾生は岐阜県外から来ていますので、ほとんどが I ターンという形ですね。他所から来て、飛騨木工連合会のいろいろな会社にもお世話になっていると思います。地域との連携ということで言いますと、最近は地域おこし協力隊の制度を活用して、地域の林業と組みながら、単にものづくりをするだけでなくて、ものづくりを通して地域の林業まで活性化していく、そんな事例も出てきています。

そうした人材を育成していく上で、私たちが掲げる教育の基本方針は、現場重視の実践教育、木の総合教育、ものづくりを通した思考力の育成、という 3 つですね。他の学校と大きく違うのは、私たちは現場で育成するということをやっています。たくみ塾に入ってくる前はほとんどが木工未経験なんですけども、入塾式翌日からもう現場に入って、やったことのない木工作業、使ったことのない木工機械をいきなり使って、身体で覚えていくということをやっています。手掛けるものは、課題作品とかではなくて、実際の製品です。1 個 2 個作るわけではなくて、1 ロット 100 とか 500 の数を 1 ヶ月かけて作っていく。昨年度の実績ですけれども、工房の中では年間に 40 品目、2 万 7 千点以上を手掛けています。年間 2000 時間以上、現場での実習時間があります。あとは木の総合教育としまして、(昼は現場での実習ですが) 夜の時間に週 2 回、技術講座と環境講座を 2 本持っています。この技術講座の方では、手工具の仕込みから始まりまして、課題製作に取り組みながら、木工の基本を学んでいくということをやります。これは、私たちがなんで木という素材でものを作らなければいけないのか、木という素材がどういうところで育っているのか、その森というのが、地域の中、地球環境の中でどういう役割を持っているのか、あるいは人間との関わりの中で森林がどういう変遷を経てきたのか、そういうところまで深めた上でものづくりをしていける、そんな人材を育成しています。

森林たくみ塾 小木曽塾長

私たちのたくみ塾は、基本的に木工未経験の人たちの受け入れをしていますけれども、ものづくりに対して自分がプロの職人を目指す、そういう強い意志を持った人たちを受け入れて、2 年で育成をしています。かかる費用は、受験料と入塾金です。授業料は無料ということで行っています。あと、選考を年に 6 回設けていますので、またご検討ください。ありがとうございました。

玉田

それでは、飛騨職人学舎の説明をしていきます。飛騨職人学舎は 2014 年に設立しまして、飛騨産業が母体となっておりますが、別組織にしていまして、一般社団法人の飛騨職人学舎です。ですので、飛騨産業の社員ではなくて、飛騨職人学舎の生徒という形になります。職人学舎の基本理念として 3 つの柱があります。1 つ目「世界に感動を与える一流の木工家具職人の育成を目指します」。2 つ目「伝統技術の継承、匠の技を次世代へ伝えます」。3 つ目「人間力を育む職人としての心構えと人間性を育てます」。この 3 つの柱を大切にして指導をしています。

飛騨職人学舎 玉田学舎長

職人学舎の基本情報ですが、修業期間は 2 年間で、卒業後は飛騨産業に就職できます。学費は無償で、全生徒に返済不要の奨学金毎月 8 万円を支給しています。生活環境やルールですが、飛騨産業から歩いて 15 分ぐらいの古民家をお借りして、そこを寮にして共同生活をしています。朝食と夕食は自分たちで作っています。もちろん、洗濯とか掃除とかも自分たちで行っています。携帯電話や恋愛は禁止です。休日は毎月の最終日曜日の 1 日だけ。あとはお盆休み、正月休みの各 1 週間です。今年の 3 月末時点で 10 期生まで、計 31 名が卒業しています。男子 18 名、女子 13 名で、ほとんどの入学者が高卒と大卒の新卒です。31 名の中から、飛騨産業で働いているのは 13 名います。日々の修業を大雑把にまとめると、朝 5 時半に起床してランニングし、規則正しい生活習慣を身につけます。午前は、1 年生は飛騨産業の工場で研修しています。こちらで、飛騨産業の実践的なものづくりを経験することができます。2 年生は、工房で木工技術の習得をしています。午後は 1 年生、2 年生とも教室や工房で課題作りを行っています。夜は自己研鑽の時間ということで、その日使った刃物を研いだり、レポートを書いたり、あとは自主製作の時間に充てます。

1 年生の実習内容ですが、4 ～ 5 月は、基本技術の習得ということで、かんなやのみの仕込みから、刃物の研ぎ、手工具の使い方を勉強して、仕口 (しくち。部材同士を接合させる加工) 課題などの製作を行います。6 ～ 7 月は、技能向上期間としまして、主に技能五輪予選の練習を行います。この練習をすることで、技術が飛躍的に伸びます。8 ～翌 1 月は、課題作品の製作ということで、箱物ですとか、椅子、スツールとか、キャビネットの製作を行います。2 ～ 3 月は、自由作品の製作ということ、自分でデザインして図面を起こして、材料仕入れから製作まで一貫して 1 人で行います。2 年生の実習内容ですが、4 ～翌 1 月は、課題作品を作りながら、機械の安全な使用であったり、治具 (じぐ。材料の位置決めや固定などに用いる補助器具) 作りの勉強を行います。2 ～ 3 月は卒業製作ということで、「お世話になった人へ贈るもの」というテーマで自分でデザインして図面を起こして、製作まで一貫して行います。大抵、お父さんとかお母さんへプレゼントする家具を作っています。ステップアップの道筋ということで、飛騨職人学舎は、2 年間で終わりと考えているわけではなくて、卒業して飛騨産業に就職して、より実践的な技術を身につけて、各職場環境でリーダーになれるような人材を育てていくことを目標としております。ありがとうございました。

久津輪

では最後に、森林文化アカデミーの説明をさせていただきます。
森林文化アカデミーは、今の 3 校とは違って岐阜県の美濃市にある、2 年制の県立の専門学校です。学科は、高卒で入学して林業や林産業を学ぶエンジニア科と、大卒または社会人経験を経て、林業経営や森林環境教育や木造建築の設計や木工を学ぶクリエーター科、この 2 階建てになっています。学生の総数は 2 年合わせて 80 人ですから、小さい学校ですね。木工専攻には教員が 3 人いて、手工具、伝統工芸、グリーンウッドワークなどを専門にする私と、木のおもちゃ、木育などを専門にしている前野、それから家具製作や地域材の利用などを専門にしている渡辺、この 3 人です。(木工専攻の) 学生数は年によって変わるんですけれども、今は 2 学年合わせて 8 人 です。年代は 20 ～ 60 代まで、男女比はだいたい 2:1 ぐらいでしょうか。入学前のキャリアは実にさまざまで、大卒ですぐ来る人もいれば、一部上場企業を退職してくる人、会社を早期退職してくるという人もいますね。

森林文化アカデミー 久津輪教授

森林文化アカデミーの強みというのは、なんといっても木工や家具製作にとどまらないというところだと思います。元々が林業の学校でしたので、森林から木材までの流れというのを総合的に理解できるということですね。また、木育からデジタル加工まで、非常に幅広い技術を教えています。もう1つ、大学の卒業研究に当たるようなものですけれども、1年間かけて社会的な課題に取り組む、課題研究という科目があるというのも特徴です。2年間の流れは、全学生が一緒に森林や木材について学ぶ共通科目というのがありまして、並行して、木工の専門科目が始まります。まずは手工具、電動工具、木工機械の使い方など、基礎的なところから学び、だんだん応用的な木工技術に移ってきます。2年生になると、学生1人1人がテーマを決めて課題研究に取り組むことになります。

森林文化アカデミーは地域材の活用というのが一番大きなテーマと言ってもいいものなので、特徴的な科目をいくつかご紹介しますと、学内に簡易製材機や乾燥設備があって、学生が自ら小径木などを製材して乾燥させて、それを家具作りに生かすという実践を行っています。それとデジタルファブリケーションとして、NCルーターやレーザーカッターなど、最先端の機械を使って作品製作を行っています。一方で竹細工、漆塗り、曲げ物など、岐阜県にゆかりのある伝統技術を学ぶという授業も行っていて、卒業生の中から職人を輩出していて、今は卒業生たちが現役の学生に教えるということにもなっています。木育は森や木に触れることで豊かな心を育むというものですけれども、木育の実習では、木育教室の企画運営を学生がやったり、木のおもちゃのデザイン・製作をしたりする授業がありますね。グリーンウッドワークは、生木を乾燥させないまま手道具で割って削って、小物とか家具を作る木工のことなんですけれども、スプーンを削ったり、学校の教室で使う椅子を製作したりしています。最後に、商品化という授業があるんですが、2年生がかなりの時間を費やして取り組む科目になります。これは学生1人1人がオリジナルの弁当箱をデザインして、夏休みの間に試作して、自ら使って試す。それを経て、9月に1人10個ずつ製作し、10月の地元のクラフトイベントで販売するというものなんですね。これは毎年レベルの高い作品が生まれていまして、ほとんど完売しています。卒業生の進路は、起業したり就職したりして、家具やカトラリーやおもちゃを作るという人が一番多くて、その他に下駄や竹細工や曲げ物の職人になった人もいます。木育の関係でも、グリーンウッドワークや木育のNPO法人を立ち上げたり、シェア工房を起業するという人もいます。

費用に関しては、入学金が28万2千円、1年間の授業料53万5千8百円が2回なので、道具代、材料代、生活費等を含めると、おそらく2年間で250万円から300万円ぐらいのお金がいることになると思います。入学前に貯蓄してから来られるという人がほとんどですね。興味のある方は、ぜひオープンキャンパスにお越しになってください。ありがとうございました。

第２部　各校の特長と人材育成への想い

久津輪

というわけで、駆け足で４校の説明をさせてもらいましたけれども、実はいろいろな違いがありまして、例えば、こちらの２校（アカデミー・木芸）は県立で、そちらの２校（たくみ塾・学舎）は、民間家具メーカー関連の学校ということになります。それから、木工芸術スクールだけは１年制ですけれども、他の３校は２年制になります。実習内容も、木工芸術スクールは１年間でコンパクトに技術を学び社会に出ていく、たくみ塾はひたすら数を作る中で、技術を習得していく、職人学舎は手道具、手加工に力を入れているというような特徴があると思います。そして、森林文化アカデミーは、そもそも家具製作に限らず、幅広く木工というものを捉えて、人材育成を行っていると。実は、このように１つの県の中に、４つも木工の教育機関があるというのは、おそらく岐阜県だけしかないと思うんですよ。これだけの専門的な教育機関が揃っているというのは、家具産業というのが高山にあって、業界と密接な連携を持っているというところが理由なのかなと思うんです。家具、あるいは木工の業界と学校とで、どのような連携を取りながら進めているかというところを、皆さんにお聞きしようと思いますけど、木工芸術スクールはどうですか？

菊地

うちは定期的に企業の方や、地元の教育関連の有識者の方と会議をさせていただいて、どういった人材、どういった技能を持った人が必要だとか、そういった情報交換を常にしております。また逆に、うちの訓練生たちがどういった会社で働きたいのか、こちらから情報を提供して、お互いにこの地場産業を盛り上げていくために、協力をしています。

久津輪

最近だと具体的に、企業さんからどういうリクエストがありましたか？

菊地

技術的なことだと、家具作りには、サンドペーパーで研磨するという作業が欠かせないんですね。以前までは、あまり（研磨についての基礎的な訓練は）なかったんですが、要望を受けて、現場で今必要な技能をちゃんと訓練に取り入れようということで、カリキュラムを見直してやっています。

久津輪

なるほど。職業訓練校というと、厚生労働省が定めたルール的なものもあると思うんですけど、高山ならではのオリジナルアップデートもできるということなんですね。

菊地

そうですね。訓練生のいない春休みに、県内のいろんな企業で（指導員が）就業体験をさせていただいて、私の経験だけじゃなく、現場でどういう技能、どういった人材が必要なのかということも、情報交換をしながらカリキュラムを毎年見直しています。

久津輪

先生が自ら企業さんで研修を受けながら、現場のニーズを掴んでくるということなんですね。すごいですね。高山、あるいは家具産業との連携というところで、たくみ塾はどうでしょうか？

小木曽
たくみ塾自体が直接、地元の企業との関わり、連携を持つってことはちょっと少ないんですけれども、卒業生が今 44 人高山に残っていて、グループのオークヴィレッジに、今現在、10 人弱ほどいます。それ以外もね、いろんなメーカーさんで仕事をしている人が多いので、そういう意味では、地場の産業を支えているというところはあるのかなと思いますね。

久津輪
今、関連のグループというお話でしたけど、必ずしもたくみ塾で学んだから、オークヴィレッジに就職してほしい、というわけでもない？（進路は）もっと幅広く捉えているという感じなんですか？

小木曽
そうですね。さっきの（卒業生）271 人のうち、オークヴィレッジに入ったのが、多分 20 人ぐらいしかいませんので、基本的には育てて外へ出していく、あるいは、一部は海外の工房にも就職していくという形ですね。

久津輪
飛騨職人学舎はどうでしょうか？

玉田
職人学舎は飛騨産業が母体となっていますので、1 年目の午前中は飛騨産業の工場で研修ですね。1 ヶ月ごとに各職場を交代で回っていきますので、木取から、機械加工、磨き、塗装、梱包まで、1 通りのプロセスを経験することができます。生徒には、お礼奉公ではないんですけど、卒業後は最低 2 年間は（飛騨産業に）いて、より実践的な技術を身につけてほしいと言っています。

久津輪
ありがとうございました。森林文化アカデミーは、森林・林業や木工・木育などに関して、高山市や飛騨市などと連携協定を結んでいるんですね。例えば、ワークショップをやるからアカデミーの学生さんも来てもらえませんか？というような要望があって、一緒にやらせていただいたりとか。そういうご縁があって、就職に結びついたりとかもあったりしますね。あとは、家具産業にとどまらないという話で、岐阜県の中津川の方には杉とかヒノキを使った木工産業がたくさんあるので、そういうところに学生を連れて見学に行ったりする中で、人材が必要なんだよということで、インターンシップや就職に結びつくということがありますね。岐阜県内の木工産業とかなり密接に連携しながら、人材育成をやっているという感じはありますね。

続いて、学生像が今までとこう変わってきているとか、どういう学生さんたちが実際にいるかというお話をしてもらえますか？

菊地
木工芸術スクールの生徒は 2/3 が県外から、残り 1/3 が岐阜県内から入校してくれます。年代も様々で、高校を出てすぐっていう方もいれば、美術系の大学を出たんだけど、作り方がわからないから、うちに入るという方もいます。全く違うジャンルの仕事をしてて、昔からものづくりがやりたかったということで、入校する方もいます。実は、私自身も県外の出身でして、22 年前に家具職人になりたくて、木工芸術スクールに入りました。うちで 1 年間学んだ後、飛騨産業さんに入社をしまして、11 年間働かせていただきまして、その後、今度は指導員として木工芸術スクールに戻ってきて、今 10 年が経つというところです。私のように、やはり県外から入る方が 2/3 なんですが、就職先というと逆転するんです。今度は 2/3 が岐阜県内に就職をしているということで、移住する方が多いという特徴があります。

久津輪
はい、ありがとうございます。たくみ塾はいかがしょう？

小木曽
出身でいくと、高山出身の子が過去から数えて 5 人ぐらいかな？
岐阜県内でも、私を含めて、多分 10 ～ 15 人ぐらいしか数えられないかなと思いますので、大半が県外からです。結構地元に残っている子が多いかなという印象ですね。年齢構成で言うとですね、高卒以上という制限はあるんですけれども、20 年ぐらい前だと、20 代後半が中心層かなと思っていたんですけど、ここ 10 年近くは 30 代半ばぐらいが中心層かなと思っています。上は 50 代、一度 63 歳の人もとっていますけれども、結構年齢は上に来てるかな。あと独身だけでなくてね、結婚している、あるいは子供がいるという、家族がいる人たちも木工に踏み出してくる。例えば、多分収入だけで言ったら、前の仕事を続けていた方が絶対に収入がいいだろうなと思うような大手の自動車メーカーを辞めてくるのが 4 人ほどだったり、電機メーカーをやめてくるのもいます。あるいは最近ですと、公務員、あるいは学校の先生を辞めて入ってくる。そういう人たちもいるので、いわゆる収入ではつかめないものをつかみたいという、単に仕事を変えるんじゃなくて、生き方、暮らし方を変えていこうという、そういう思いで入ってくる。覚悟を持って入ってくる人たちが増えてきているかなと思いますね。

久津輪
ありがとうございます。職人学舎、いかがですか？職人学舎 (の学生) はちょっと若いですもんね。

玉田
そうです。高山市以外の人がほとんどで、高卒大卒の新卒が多いですね。木工の経験をしていない者がほぼ全てなんですけれども、やっぱりものづくりをしたくて、木工をしたくて来る子が多いので、すごい真面目で素直な子が多いですね。

久津輪
ありがとうございます。さっき菊地さんも県外出身で木工芸術スクールへ、というお話がありましたけど、私も出身は九州なんです。福岡県で育って、20 代の頃は全然違う職業で働いていたんですけれども、やっぱり木工がやりたい、学ぶなら岐阜県ということで、実は森林たくみ塾で 2 年間学ばせてもらいました。その時に 1 年後輩でいたのが玉田さんで、もう本当に昔からずっと知っている同窓生なんです。今は教員として 20 年目なんですけれども、岐阜県内に残って、次の世代の人たちを育てていることになりますね。

森林文化アカデミーに関しても、やっぱり入学してくる人たちの 8 ～ 9 割は県外ですかね。大学を卒業してすぐ来る人もいれば、1 番多いボリュームゾーンは 30 代半ばぐらいでしょうかね。私自身もですけど、30 歳を過ぎたところで、これから一生の仕事としてやっていくのは何がいいのかなと。都会の企業で働き続けるのか、それとも地方に根ざして手で仕事をしていくのかということで、木工を選ぶ人が多いような気がしますね。その一方で、最近は 40 代後半～ 50 代の人たちがとても多いような気がしていて、やっぱり人生 100 年時代ということと関係もあるような気がするんですね。社会のシステムだと 50 代になってくると退職というものが見えてくる。60 歳とか 65 歳でリタイアしなければいけないんだけれども、まだ身体は 70 代でも全然元気じゃないですか。でも、もっと社会貢献したいという人たちもたくさんいらっしゃいます。だからまだ技術が覚えられるうちに早期退職をして学校に入って、今度は半分生業、半分社会貢献的な形で、木工の仕事、木育の仕事、そういうものに携わりたいと思って入ってくる人が多いような気がしますね。

久津輪
岐阜県内から（の入校希望者）が意外と少ないのはなんでだと思います？

菊地
私は、家具職人になりたいって思ったときに、地元の家具屋さんに相談に行きまして。そこで「家具、何が作りたいの？」「椅子が作ってみたいです」「じゃあ、高山だよ」っていうふうに教えてもらいまして、高山に学校があると、初めて知りました（笑）
今、自分が指導員となって全国の職業訓練校を見ますと、木工科は本当に少なくなりまして、やはり「木工産業のあるところに設置された訓練校」っていうことで、うちはかろうじて残っているというような感じです。

久津輪
この 4 人の中で、岐阜県出身は小木曽さんだけなのかな？

小木曽
私も美濃地方なので、高山なんて別の国と（笑）、雪国ですからね、全然違うところと思ってました。

久津輪
玉田さんは、なんで地元の方が少ないか、何か想像がつくことがありますか？

玉田
高山の若い子は都会に出たいという思いがあるんじゃないですかね。逆に都会の人たちは、田舎の方に住んで木工をしたいという、そういう思いがあるんじゃないかな。

久津輪
そうですね。私も、それはとても自然なことかなとも思っていて、やっぱり一度は違う地域に出てみたいということはありますよね。あと、私は特に伝統工芸の職人さんの後継者育成のお手伝いをさせてもらっているんですけども、（今までは）やっぱり息子が後を継ぐパターンが多かったんです。だけど、お父さんはすごく需要が上向いていた時代を生きていたけれども、息子さんの世代はそのビジネスのいいところが見られないというところがあるのかなと思います。県外から来る人たちというのは、その産業のいいところだけを見て来てくれるというか、それこそ椅子が作りたいと思ったときに、「じゃあ、高山だ」と言ってくれるというか。やっぱり輝いて見える場所というのが、この高山であり、岐阜県なのかなという、そんな感じがしますね。

Instagram でのライブ配信

先ほどお話もあった卒業後の進路に関して、木工芸術スクールだと 2/3 が県内に定着し、飛騨職人学舎は少なくとも 2 年間、その先も飛騨産業で熟練の技能工としてやられる方が多い。たくみ塾の場合は、割と全国に広がるけれども、結構岐阜県内も多いということでしたよね。岐阜県内への就職というのは、やっぱり先生の方からアドバイスする感じですか？それとも、学生自らが選択しているという感じですか？

菊地

1 年間でとにかくできる限りのことはやるんですが、やはり木工というのは奥が深いので、折角高山に来たのであれば、岐阜県内の企業に就職して知識や技能を高めた方がいいんじゃないか、という話はします。ただ、最終的には本人の意思ですので、会社を見て回って、自分のやりたいことに合う会社を選んで、みんな就職しています。結果的に岐阜県内が多いっていうのは、やはり企業に魅力があるのではないかな、と思います。

小木曽

たくみ塾では、基本的に就職って斡旋していないんですよ。ここ 10 年ほどいろんなところから求人票はいただくんですけども、結果的に塾生たちは自分でネットで探して、自分がやりたいと思っている仕事をやっているようなところへ、足を運んで就職活動をしていきます。ですから外へ出ていく者も多いんですけれども。特に最近ちょっと耳にするのは、県外で独立してみたけれども、刃物の 1 つ買うのにネットで頼んで配達が来なきゃいけないとか、研磨がすぐできないとか、木工のインフラが整っていないからやっぱり高山に戻ってきて独立する、そんな話もよく聞きます。あと、メーカーさんに就職している人からは、高山が子育てがしやすい町だということはよく聞きますね。

久津輪

森林文化アカデミーの場合は、8 ～ 9 割ぐらいが県外からなんですけれども、就職するのは岐阜県内が多いですね。それはやっぱり、岐阜県は木工の産地であるということ、それから、岐阜県の自然環境とか、暮らし心地とか、そういうものに魅力を感じてくれて定住するという人が多いような気がしますね。あと、先ほど小木曽さんが話してくれましたけど、特に高山というのは、材料を調達するにしても、あるいは刃物 1 つ研磨するにしても、いろいろな副資材を調達するにしても、本当にすぐのところに (関連企業が) あるというね。

小木曽

機械が壊れたときにすぐ来てくれること、これ大きいですよね。

久津輪

大きいですね！だから木工を仕事としていく上で、企業に勤めていたとしても、あるいは個人で工房をやるにしても、このインフラが整っているということの恩恵って、ものすごく大きいと思うんですよね。私はいろんな木工の産地を見学に行って、木工の教育機関も見学するんですけど、高山に匹敵するところというのはないな、と思いますね。やっぱり木工の仕事がやりやすいですよね。

もう 1 つ聞いてみたかったことですが、木工技術って今すごく進歩しているじゃないですか。私がたくみ塾にいたのが 25 年ぐらい前ですけど、当時と比べても格段に進歩していて、NC ルーターとかレーザー加工機とかが、超大手の会社だけではなくて個人の工房でも使われるようになってきています。教育機関としては、それにどう対応していくべきなのか。先ほど、業界の方からのリクエストがあって教育内容をアップデートしていますよというお話もありましたけど、技術の進歩に対してはどう思われますか？

菊地
これからの木工技術者の理想の姿っていうところは、正直私はわからないです。でも私の使命としては、わからなくてもいいのかなというのが正直な思いでして。常に、木工産業の方たちが求める人材、必要な技能というものを把握し、知識や技能を身につけられるカリキュラムを行っていくということが大事だと思います。うちで学ぶ訓練生にとっては、就職したい会社に就職した後に必要とされる知識とか技能を発揮して、会社で活躍できる。そういった力をつけさせてやるということが、大事だと思っています。ものづくりにおいて、新しいものを作ろうといった時には、やっぱり技能ってものが 1 番大事だと思います。将来の土台となるような力を、1 年間でつけさせてあげること、それを今後も継続してやっていきたいと思っています。

久津輪
はい、ありがとうございます。たくみ塾はどうですか？いろいろなものが変わっていきそうですか？

小木曽
実際に変わってきていると思います。ただ、たくみ塾の 2 年間っていうのはね、「技術は後からついてくる。まずは仕事を覚えなさい」ということで、この 2 年間でとにかく職人になるってことをやる。卒業して就職した先で必要な技術というのは、後から身につければいいぐらいに思っています。独立している子たちだと、機械をあまり使わずに、手加工だけでものを作っていくような作家さんもいますし、今 NC でいろんな作品を作っていく、そんな作家さんもいますが、そういう技術というのも、本当に自分の手の延長なので、どういう手の延長にそういう技術、道具を持ってものを作っていくかという。それはもう人それぞれあっていいと思っていますね。

久津輪
職人学舎はどうですか？

玉田
そうですね、いかに機械化が進んだとしても、飛騨の匠の技術を後世に伝えていくという意味においては、かんなを綺麗にかけるとか、のこぎりでまっすぐ切れるという技術は、しっかりと教えていきたいと思っていますし、技術的なことよりも、ものづくりの考え方というのを、この 2 年間しっかり教えていければ、どこに就職してどんな機械を使ったとしても、考え方を生かして対応していけるのかなと思います。

久津輪
ありがとうございます。私自身はですね、悩み続けていますね（笑）。そもそも私自身は全く別の仕事をしていて、木工をやってみようと思って 30 代の頃に転職して、当時は教員になるとは本当に夢にも思っていなかったんですよね。ご縁があって教員になったんですけれども、本当にこうして社会とか、あるいは技術がものすごいスピードで変化していく中で、教育機関では何を教えて、どんな人を育てればいいのかというのは、本当に日々悩み続けているようなところがありますね。そんな中で、幸いなことに岐阜県にはこうやって 4 つの学校があって、教員同士も仲がいいので、よく一緒にこういう話をしたりもするんですよ。この間も木工芸術スクールに訪問させていただいて、先生方と話をしていた時に、社会がどんなに変わっても基本技術というのはやっぱり揺るぎないものがあるから、まずそれをきちんと届けるというのが役割だよねというようなお話もあったりして。ああ、なるほどそうだよなと思ったりすることもありました。

久津輪
あと、森林文化アカデミーの特徴から思うこととしては、木育やグリーンウッドワークという、楽しんでいただくための木工をやっていますよね。そのニーズが今とても多くなってきている。それから、海外からの問い合わせがとても多くなっていて、海外の人が木工を学びたいという問い合わせが来ている。日本の千数百年の伝統のある木工の技術というのは高山に蓄積されているわけで、それを日本に来て学びたいという人もとても多くなっているんですよ。だから、木工というのは元々製造業、第 2 次産業だったわけですけれども、今では第 3 次産業的になっているというか、教育であったり文化であったり、そういうものを伝える役割として、木工の技術者の活躍の場が増えているのかなという感じはしているんですね。だから、そういうことも意識しながら学校のカリキュラムを組んでいる、でも…日々悩んでいるというところですね (笑)。

大体、終了の時間になってきましたけれども、学生の皆さんが何人か見えるので、ちょっと話を聞いてみましょうか。木工芸術スクールの学生さん、誰かいます？

菊地
いっぱいいます (笑)
―― 4 月に入校して、今 3 ヶ月ほど経ちましたが、実際どうですか？学校の感想は？

木工芸術スクール訓練生
本日は大変貴重なお話ありがとうございました。
皆さんのお話を伺って、さまざまな考えで教育してくださってありがたいな、っていう感想です。まだ入校して 3 カ月で、目の前の訓練をこなすことで精いっぱいなんですけども、きちんと働ける人材になるように、１年間頑張らなきゃなと気を引き締めました。ありがとうございます。

久津輪
ありがとうございます。たくみ塾の学生さんはいますか？

森林たくみ塾卒塾生
とてもためになる話をありがとうございました。今、美濃地方でNCを中心にした木工をやっていまして、NC のオペレーターを探している状態です。オペレーターについて、今後、教育できる準備があるのかどうかっていうのをお聞きしたいんですけど、どうでしょうか？

菊地
基本的なプログラムをメインに、NC の授業をやっております。今、ソフトの方もだんだん発達してますが、基本を理解していれば、あとは現場それぞれの機械に合わせて、作業の方はやっていけるかなと思ってます。まだ、3 軸の NC しかありませんが、現在でも授業はやっております。

久津輪
ありがとうございます。せっかくなので、職人学舎も。

飛騨職人学舎 1 年生
4 人の経歴とか、いろんなお話を聞けてすごい楽しかったです。ありがとうございます。職人学舎に入って、皆さん本当に優しく教てくれて、おかげで堅実に技術を磨くことができているので、これから 2 年間頑張りたいと思います。

久津輪
はい、ありがとうございます。じゃあ、森林文化アカデミーも行きましょうか。

森林文化アカデミー 1 年生
貴重なお話ありがとうございました。岐阜県内に学校が 4 つあるということ、それぞれの特色というか、個性みたいなものが、すごく分かりやすく理解できました。自分は木工専攻ということで入学させていただいたのですけれども、学べる範囲がすごく広く、いろんな視点から学ぶことができるというのは、ありがたい一方で、自分の中でどうしてもフォーカスがぼやけてしまう恐れがあるという心配をいつもしていて、学校に来て自分は何を学びたいのかということはやっぱり定期的に振り返っておかないと、軸がどんどんぶれていってしまうので、そこはいつも意識しています。

久津輪
そうですね。森林文化アカデミーは森林、流通から木工まで学ぶので、どれも楽しいから、時々振り返らないと軸がぶれてしまうというお話でしたね。

ちなみに、最後に少し紹介しますけれども、木工芸術スクール以外の 3 校は 2 年制なので、応用的な木工の実習もできるということで、「3 校合同プロジェクト」として、民間の企業さんから課題を出していただいて、学生たちで家具のデザインをしています。(スライドで写真を紹介しながら) これはテーブル脚のデザインに取り組んでいるものです。ここ 3 年ぐらいやっていまして、今年も進行中なんですけれども、去年はこういうテーブルの脚とかですね。あとこれは、なんと磨き丸太を和室の床柱ではなくて足を置く台として使ってみたという。こういうものが提案を求めた企業さんから大変好評で、実際に商品化されたりしていまして。こういうものを通じて、お互いの学生同士も、お互いの学校を知り合ったりとかね。切磋琢磨するモチベーションになったりとか、そういうことがあったりもします。

ということで時間になりましたので、このあたりまでにさせていただきたいと思います。これからも、4 校連携しながら、岐阜県の木工業界、家具業界のために、人材育成を頑張ってやっていきたいと思います。今日はどうもありがとうございました。